

一物もなきを玉はる心こそ

本來空の妙味なりけり

百七十八

それよりいろく〜と法談があつた、蜷川が問ふ聲の下に和尚は歌にて答へられた、蜷川、

邪正一如はと問へば

生れても死ぬなりけりおしなべて

しやかも達磨もねこも杓子も

空即是色はと問へば

花を見よいろかも共に散りはてい

心なくても春は來にけり

佛法の心得はと問へば

佛法はなべのさかづき石の髯

繪にかく竹のともづれの聲

この話は後に作家がこしらへたちやと云ふ人もあるが、われはともかくに、虚かほんまか實地に研究して見たひと云ふ志のある人をまつのである。

〇月に向ふの聲

法性眞如の月とか菩薩清涼の月とか云ふて、京童に觀月汽車の割引期日を尋ねられんよりは、古人が月に向ふの聲の二三を捉るとしやう、これを教訓とする人も、しかせざる人も、共にわれにはよき友である、

破れ鐘の響もあつし夏の月

北 枝

百七十九

霜百里舟中に我れ月を領す

蕪村

月に柄をさしたらばよき團扇哉

宗鑑

行燈につまづく人や今日の月

菟涼

月は一つ影は三千世界かな

失名

○おどけ善光

善光和尚は洞門の人なり、平生奇行多く人稱して「おどけ善光」と云

ふた、或時、越前に行脚してたま〜廢刹あるを見、之を再興しやと

思い榜に大書して曰く、

三國行脚の善光禪師、本月某日火定を示す、志ある衆生は薪炭、米錢を喜捨し、來つて拜觀せよ、

と、これを所々に立てたのである、此において遠近の人々競ふて米

錢を寄附し、寺に來りてまつ事久し、善光は薪炭を備へて、今や入

定せんとするの勢を示し、命じて曰く、余が手を擧るを待つて燧火

せよと、穴に臨で立ち默然として良久ふす、忽ち天を仰で點頭し呼

で曰く、

聞けよ、雲中頻伽の聲あり、余今入定せむとするに菩薩

みな曰ふ、汝穢土厭離の念を起すこと尚ほ早し、暫く忍で

穢土に止りて衆生を救へ

と故に今日は火定を止むと、乃ち集る所の米錢を以て容易に廢刹を

興すことを得たりと、善光の所爲は大に奇狂に似たるも、自個の慾

望のために信施を濫用する末世の人にいづれ。

○元政の壁書

深草の元政は洒々落々な面白ひ人であつたと云ふことであるが壁書
てふ云ふが傳へてある。

不幸にして世を背ける墨の衣にはあらず、髪を結ばせるむづかし
さにあたまを剃り、茅の軒端、竹の柱に身を軽ふ、爰にとめをき樂
む、心から浮世を見るに、東西に走り南北に行く人、多くは身を思
ふ事業にのみ足を空くして、吉野の花のあはれをも知らず、深草
の鶉の聲を聞ても焼いてやりたいとばかり思ひ、後に何になる事
ぞや、かく静かならぬは人間のみならず、山を出る雲は雨を催さ
んとて岫を出で、深山の鹿は妻戀ふ世話に聲の限りを啼きあかす、
これを思ふに此身ほど世に樂なことなし、惠心の作の佛もとより
後世を願ふためにあらず、持傳へたる道具なれば御宿申すまでな

り、極樂へ行きて樂みたいと思ふ欲なければ、地獄へ落る恐も無
し死ぬるまで生きて居やうと思へば、年の寄るも糸瓜ヘチマとも思はず、
籬のこぼれ種の牽牛花、ゆがまうが、ちらうが、あんなものと思
ひ、時雨ふる夜の小夜嵐、吹かうと吹くまいと我身ひとりの苦に
もならず、膝を容るゝ二枚敷にて事足り難煮を食はぬ身には聞か
せまいと云はぬ鶯の聲も快く聞き、夜着持たぬ家にはさすまいと
も云はぬ依估最負のない窓もる月を眺め、寐る筈の目なれば眠た
ければ晝もかきこもり、あるく筈の足なれば、手の奴、足の乗物、
心の行く所へゆけど、盗みせぬ身なれば人も咎めず、學びたる事
なければ忘るゝ事も無し、歳を數へたことなければ幾つやら知ら
ず、あら樂や人目が人と思はねば、人をも人と思はざりけり、

深草の元政坊は死なれたり

我身ながらもあはれなりけり

或は諷し或は笑ひ、其神思の飄逸にして自在なる大に喜ぶべきあり、彼れを知るの人が幾許多少であらうか。

○苦修精練の人

精練と苦修は人の忘れてならぬことであるが、往々は境遇のために身を誤るものが多いからよく注意すべきである、

往昔、關東に良算と云ふ人があつたが、この人が一寸味ひのある事を云ふた、

「身は是れ水上の泡、命亦草葉の露の如し、若是を愛護せば甚だ至愚とす、況や五陰假りた舍り、四倒の悪鬼恒に其中に處して、

荐りに我心を欺誑し、能く種々の罪惡を作る、我何ぞ此の如き邪鬼のために此身を保祐せんや、この故に我更に身命を惜まずして苦修精練すと。」

和州金峰山の薜ケ嶽に住すること數年、穀鹽を絶し淡菜を食ひ荷葉を襲ね木皮を綴りて上衣としたりと云ふ、然れども彼が苦修精練の力は鬼神形を現じて果鹹を供養し、猛獸毒蛇皆悉く訓伏するに至りたりと、鬼神の形を現するや敢て怪むこと莫れ、常樂我常の四惡鬼が何處に居ると云ふことの分るそれまでは呵呵。

○泥中の蓮花

無三和尚、かつて薩侯の命を奉じて福昌寺に住す、時に南林寺の僧某なるものあり、大に和尚を妬み竊かに之を辱めんと欲し候に謁し

て曰く、明日福昌晋山の式を行ふ候もまた商量一番し玉へとて語を教ふ、翌日無三の上堂するや侯忽ち進み、大聲に問ふて曰く「如何なるか是れ久志良の土百姓」薩摩の風俗大に農民を賤みて士人にあらざれば出家することを許さず、和尚もと久志村の農民なるを以て士家の姓を借りて出家す、故にこの問をなして辱めむとしたるなり、無三驚く色無く直に答て曰く「泥中の蓮花」と侯大に感じて厚く歸依せられたりと。

○甲斐の祖鏡

人の妻を戒むとて

きのふの嫁はけふの婆さま

姑の短をいふことなかれ

と題して女のうしろすがたの書を書きて興へたと。

○蜘蛛と毛虫

澤庵禪師、或時人に示して曰く「大なる蜘蛛クモの檐にかゝりたるを地に落せば足を收めて石の如くなりて死をのがれんことを謀る、彼の小知にして人を計らむとす、少しにても走りのがるればその程も命存すべし、彼の謀は人能く知り、彼は思ふべし人は知らじと、無智の人の有智の人を謀ることも蜘蛛の謀畧に同じ、又毛虫の大なるもの地上に行く、これを犯す時は即ち憤然としてそりまがれり、かくの如くなれども人これを事とも思はず、小人の大人に向つて此の如き風情をなすこと毛虫に異らず、今の世にはどちらを見ても蜘蛛や毛虫の様なものゝ澤山に居ることである。

○篩は無用なり

雪潭和尚、かつて瑞泉寺の請に應じて臨濟録を提唱す、時に犬山侯も亦た臨むで其講座を聞き簾を垂れて坐す、雪潭講座に登り大喝一聲して曰く、咄、何物の無禮漢ぞ簾中に坐して講を聴く、雪潭が講座には糟粕は無い、篩は無用なり、篩を除かざれば我は法を説かずとて、其聲あだかも雷の如く、衆みな色を失ふ、侯大に悔い簾を捨て、法を聞き玉ひしと、今の世に權貴を憚るの人多きは何故であらうか。

○藝人の覺悟

森田宗禪と云ふ人は笛の名人であつた、或時、尾張大納言の邸で御客のもてなしにとて能樂の催があつて宗禪も亦た召さるゝこととなつた、さて能は「松風」で、シテは七太夫、太鼓は一郎兵衛、小鼓は五

郎次郎、笛は即ち宗禪ときまつて、さておのおの支度も出來て、さらば始めむとする時になつて宗禪が居らぬ座敷よりは早く初めよと度びくの催促である、みなく心配をして探してをると、宗禪がぶら／＼と出て來たから、さあ早く早くとせきたつると、宗禪少しも動せず、両便が滯つてをれば業は出來るものでない、故に便所へ行つたのである、唯今は腹の具合もよくはなつたがまだくこれで

は笛が吹けぬから今少し御待ち下されと悠々としてをるから、みなくいよくせきたて、座敷よりの催促しきりにて殿の機嫌も悪いのにまだぐづぐづしてをるか、辨への無き男かなと云ふと、宗禪いよくおちつきて、おのくもさうせかれては氣たゝりて松風の位には至りませぬぞ、今少し心を落ちつけて出で玉へ、尾張様の御

機嫌を損じたからとて御出入を止められるばかりよ、藝人の一藝を仕損ずるは一代のみならず、末代までの耻でござらうぞと、烟草盆引きよせて静かに烟を吹いてをつたには、みなみなあきれたが、理の當然にかへすことばも莫かつたと云ふことである、藝人ばかりではない、何れの事をするにも宗禪の覺悟が無くてはならぬ。

○法眼とお茶屋

法眼は圓通と共に獨湛の門より出で、道交最も深し、かつて共に京にあり、一日、圓通に語りていはく、祇園にお茶屋といふものあり、師兄かつて行き玉ひたるか、圓通曰くいまだ訪ひたることなし、法眼、さらば共に行きて見侍らむとて、手を携へて祇園に行き、軒高く門亦た大なる家を見て、この處好ろしかるべしとて、つと入りて、

我は攝州の法眼なり、おのれは紀州の圓通なり、主人は何と云ふやと尋れば、主人は驚きながらも、かねて二人の智識の名を聞き及びしかば、之を一室に請じて家名などを述べ、法眼、女どもの立ちまはるを見て、主人は娘を多くもたれたりと見ゆ、この座に招かれよと云ふ、主人はをかしき事と思ひながら、之を呼び集む、法眼つくぐと見て、さはよきそだちなり、親の身にとりてはさぞうれしきことであらう、因縁のために三歸戒を授けん、何れも合掌して、我が云ふことを唱へよとて、高聲に之を授く、もはや女どもには用は無し、立ち去れよとて、法眼も歸り去らんとするに、主人これを止めて齋を供し、布施をも贈りければ、法眼はいとねんごろに廻向して歸りぬ、扱此さまを人に語りて、お茶屋と云ふものはおもしろき

ものなり、年わかき僧等の行かんとするも理あることなりとて、この後は、たゞの家にて饗應にあいてもお茶屋お茶屋と呼びきと、今の時の坊さん方はこのような話を聞いてどんな気がするであらうか。

○樹上の怪物

雲居禪師が松嶋の瑞岩寺に居られた時に每晚深林中の岩窟に到つて打坐工夫をなされたさうな、或人が師の道力を試やうと思ふて、瑞岩寺から岩窟に到る路傍の樹上攀ちて師の來られるのを待て居て、師が樹下を過らるゝ時にニユツと手を出して師の頭を攫んだ、師は佇立して少しも動かずに其手を放つのを待つて居られた、すると樹上の怪物は根機に負けて其手を放したので師は悠然として平氣で去られたと、

後に人あり師に問ふて曰く

和尚近頃怪物を見ずや、

師答へて曰く、

否、見しこと無し、但暗中物ありて吾が頭を攫みたれども其手肉の温暖なりしを見れば、或は少年の悪戯なりしならん、

とて怪まざりしと、

近時或は膽力修行と云ひ或は心膽の鍊磨と云ふ而かも能く師の如く心外無物の境に入ること知らず憐むべし。

○馬と槍

或時に盤珪國師が、人の馬に乗つてをるのを評して、今の馬乗りは馬を使ふのでは無い馬に使はれるのである、馬を自ら使ふやうでな

くては到底名人とは云へぬといひ、槍を使ふものを見ては、汝は手で槍を使ふから拙い、何故に心で使はぬかといはれた、妻に使はれるの主人、奉公人に使はれの旦那も随分あるが、一生涯何物に使はれたか分らない人も亦澤山にある、御用心御用心。

○窟の内 外

一休和尚、或時高野山に登り、弘法大師が入定し玉ふたと云ふ窟前に到りて、

弘法は虚空の定に入もせて

こゝろせまくも穴に入るかな

といへだ、窟の中より

入りぬれば虚空も定もなきものを

こゝろせまくも穴と見るかな

と云ふたと云ふ話があるが一休と弘法の心事が何れの邊まで通じ合ふてをるか、聞く人と答ふる人と何れが多きやは一つの疑問である。

○良寛の無邪氣

良寛は越後の國上山に草庵を結んで居た、然れども無邪氣なる彼は瓢然として東北に到り逸然として西南に遊び、人をして其居住を知らしめなかつた位であつたと、又喜んで兒童と戯れ、或は競歩し、或は角觥を試み、常に無我無心に其群に伴ふた、故に兒童等は大に訓慕し、良寛の去らんとするや、先づ其袖を捉へしばし彼を苦めたりしことありしと、それ故に世の人は彼を呼で痴と嘲り狂と笑ひ

し、笑ふと嘲けるは彼に於て何かある、恨むらくは彼の雄偉なる、抱負と無邪氣なる心事を知るものが無かつたのである、

一日、遊治郎が来て書を請ふた、彼は直に筆をとりて、

誰が来たか流しの隅に鳴いた鈴虫音をとめた、

遊治郎大に感じて其行を改めたと、

又常に人に語つて曰く、

私の好まぬもの三つあり曰く、詩人の詩、書家の書、庖人の饌、又彼が兒童と遊びし時の手毬謠に、

向ふの山に見ゆるは、月か星か螢か、月じやないもの、星じやないもの、あれこそ殿子の松火じやく、帯にや短し襷にや長し、御寺へ上げて、寺の坊さんの鐘の緒にしよ、

この謠が如何なることを意味するであらうか、無邪氣なる人でなくては味へることができない。

○一休の母

一休禪師の母が末期に禪師に送つた手紙と云ふがあるが、なか／＼感心な心掛である、

我等娑婆の縁づきて無爲の都に趣き候、御身よき出家となり玉ひ佛性の見を磨き、其眼より我等地獄に落ちるか、落ちざるか、不斷添か添はざるかを見玉ふべし、釋迦も達磨も奴となし玉ふ程の人に成りたまはゞ俗とても不苦候、佛四十餘年間說法し玉ひ、終りに一字不説とのたまひし上は、我と見我と悟るが肝要に候、何事も莫忘想、あなかしこ

九月上旬

不死不生の身

千菊丸どのへ

かへすくも方便の説のみ守る人は糞虫と同じ事に候、八萬の諸聖教をそらに讀みても、佛性の見を磨かずんば、この文程の事も解しかたかるべし、

どこまでも一休の母として耻かしくない。

○禪の俳諧

釋文曉、或時幻住庵にて終日丈艸と共に俳諧の事を語る、或人かたはらにありてこれを聞くに、一事として其意を解せず、其後龍ヶ岡に至りてその事を丈艸に問ふ、丈艸曰く、我がいふ所は言語の俳諧にあらずして禪の俳諧なり、その人又問ふ、禪の俳諧とは如何、丈

艸曰く、

山は唯だ青山、空はたゞ白雲、芭蕉は實に達磨、

この様な事を禪の俳諧と言ひ得べきであらうか、疑ひを抱くの人何れの處に隠れたまふか。

○御威光と極樂淨土

曾呂利新左衛門は泉州堺の鞘師で本姓を杉本と云ふた、彼は滑稽に巧にして特に奇智に長じたと云ふので、深く秀吉に愛せられ、しばしく召されて笑の媒となつた事がある、新左衛門の病危篤なるや、秀吉は見舞を贈り且告げて曰く、汝の欲するところのものあれど、何なりとも申出でよ、曾呂利は何と答へたか、

御威光で三千世界が手に入るならば、

二百
極樂淨土は我れに玉はれ

如何にも奇抜なる警語では無からふか。

○お福の紛歌

鶴林老漢の戯作にお福の紛歌と云ふがある、ちよいと歌ふてみよう、
天じやてんじやと皆様おしやる、てんのとがめもいやでそろ、
文のかずく戀ひこがれても、わしは當坐の花はいや、數の男の
思ひもこはい、見目の好いのも氣の毒じや、器量好しめと譽めそ
やされて、男ぎらひのとり寢を、命とりめと皆様おしやる、わし
は命はとらぬもの、那須の興市は矢さきで殺す、お福が目もとで
人ころす、かすの殿子はかぎりもないが、わしがいとしはたいひ
とり、婆々が紛歌はおもしろかるが、ふくがしらべは知りやらる

まい、知音どしなら歌ふもよいが、やばな客には御遠慮めされ。

女郎の誠と王子の四角

みそか／＼に能い月夜

○五萬圓の法服

峨山和尚かつて天龍寺の本堂再建の時、資助募縁のため東都の某富
豪を訪はれた、主人は和尚の法服の余りに粗末なるを見て、再建も
再建ですが、先づ衣を一枚寄附しましょうかと和尚、おれの衣は
随分高價であるから寄附して呉れるものが無いと答ふ、主人、其
衣は何程致しますかと問ふ、和尚、凡そ五萬圓と答ふ、主人驚い
てそんな高い衣がありますものかと云ふ、和尚、笑つて曰く、
おれの五萬圓の衣は、現に此頃天龍寺で、大工や左官が一生

懸命に製造してをる、

主人詰り問ふて曰く、「それは本堂ではありませぬか」和尚は更らに答へて曰く、

本堂がおれの衣じやがなあ、

如何にも天龍の本堂は和尚の衣の變形體とも云ふべきである、本堂や庫裏が五つ紋の羽織や洋服に化るのは多少の相違があると思ふ。

○世の中の上と下と

人の世の中に處するは如何にすべきか、知つた人の澤山なる割合には行ふ人が少ない、

上みれば及ばぬことの多かりき、

笠きてくらせ人の世の中

この歌の通りに下ばかり見て暮せばよいが、いや、偶々夏の頃、夕方に兩國や四條の橋の上を散歩して、下を眺めて見られよ、涼を水上に納めつゝある、輕衣にしてしかも花顔の人、若くは、財の力を知らざる、人面泥腸なる偽紳士の狂態に向つて、同情の餘、人事不省となつたら大變では無いか、さればとて、
下みればわれに優りしものもなし

笠とりて見よ空の高さを

とはどうじや、まさか、月世界まで梯子はしこを掛けて、お月さんと遊んで見ようなどと思ふ痴人もなからふが、衣服や食物や、住居の事ばかり、位高き人や財豊かなる人の眞似まねをして、人間の資格と云ふ事

に就て、少しも氣がつかんとは、誠に氣の毒なるものである、巨萬の財産を有するの主人が、流行の帽子を求めたからとて、其家に使はるゝ丁稚が一年の給料を抛つて、同じ帽子を購ふたらをかしからふ、且那は刻み煙草に和酒で、店のものがビールに巻たばこ、それで人が不思議に思はんとは、何とした變な事であらふ、金側の時計と絹セルの衣服に、己れの暗愚を包む分限知らずができて困る、上と下との呼吸によく、氣をつけて、世の中を行く時は、面白ひ事の最上である合點してをかれるが何人にも肝要では無いか。

○歳のくくれ

毎日思ふて毎日忘れ、忘れくゝて忘れ盡さぬ人ごころ、入合ひの鐘を聞いて、初めて感じて見ても遅八刻、龍關和尚、かつて、案頭の青

錢を攫んで疊の上に抛つて曰く、

勘定して見よ

それはそれとして、

百年三萬六千日、一年三百六十五、陽陰の兩曆何れの處より分

斷し得るか、

笑ふこと莫れく、

おそろしや女の眼鏡年のくれ	西鶴
白雪のつもる思ひに年のくれ	樽良
大晦日定めなき世の定めかな	信徳
來年は來年はとて暮れにけり	露人

澤庵の和尚の歌に

とやせまじかくやませじと思ひつゝ、
ことしもけふを限りとぞなる

或人評して曰く、

一とせの暮るゝのみか、人生かくの如くなるべし、

○不説の説法

愚中和尙が將軍義持の懇請に應じて京師に赴かれた事がある、其時に將軍は大に喜び、先づ使臣を以て和尙を迎へしめ、自ら弟子の禮を取り、謹みて心要を求めたるに、和尙は直に答へて曰く、
法門の事は申すまでも無く、口や舌の力にて盡さる可きものには無之候、將軍老僧を招きて何事をかなし玉ふ、現に高問を蒙るも將軍のために一法の説くべきなく、一事の附すべき無し、然れど

も古人云へる事あり、門より入るものは家珍にあらずと、請ふ將軍老僧が不説底の處に向つて了會し玉へ、
義持大に感じて益々其徳を慕ふたとある、抑もく不説底の説法は如何に了會すべきか、釋尊一代の藏經は、五千四十八卷、字數にすれば、四百五十億二萬一千八百十八字で、お釋迦さんの思召を伺へば、其舌は三千世界に延長してをる、それに一字不説とは何事か、御坐るか、禪門には無舌の舌とか無耳の耳とか云ふて、素人の目には奇妙不思議と思はるゝ品々も澤山にあれば、試みに善知識の室に入り玉へ、品性の淘汰であるの、精神の修養で候のと申したところが、かんじんかなめの御本尊を御忘れに相成る様な事では何の役にも立ち不申候。

○達磨大師と女人

無似子、一日、達磨大師が美人の衣を着し、美人が達磨大師の衣を着るの圖に題して曰く、

「維男維女、變化無方、咄々、異類中行觀自在、清風匝地有何疆、」

無似子とは洞門の變堂和尚の事である、まだ或人が達磨と遊女と對坐の圖に贊して、

九年門壁何のその、私しや十年のうきつとめ、煩惱菩提の二筋に、私しや誠の一筋を、加へて三筋で日を暮し、糸がきれたら成佛と、客のあいてにのむあみだ、濟度なさる

となさらぬと、それはあなたの御了簡、外に餘はないわいな、

客を思ふ遊女の一念、不得要領と聞き流してはなりません。

○孝 と 不孝

唯だ養ふばかりが孝行では無い、犬でも馬でも能く養ふ、敬すると云ふので、孝行となるのじやと云ふた人があるが、澤庵和尚は何と訓へられたか、

一切道に合ふ皆これ孝なり、一切道に合はざる皆不孝なり、故に一事も孝の外無し、朝寢するも不孝、晝寢するも不孝、茶呑み夜話し久しきも不孝、高談戲笑するも不孝、大酒大飲も不孝、夜行の流連も不孝、武士の未練最も不孝、出家の亂行最も不孝、喧嘩

口論みな不孝、病者の禁せざるこれ不孝、病無きものゝ強るも亦不孝、功なくしてあぐるも不孝、賦を厚くすこれ不孝、博奕好色最も不孝、主に不忠も亦た不孝、兄弟不和これ不孝、進退義にそむく皆不孝、云々、

何ぞ懇切なる、何ぞ多方面なる、古人曰く、孝は百行の基なりと、親を思い身を思ふもの、人を思い國を思ふもの、能く能く心して孝の本義を知れ。

○花園の悪草

博多の黒田侯、性太だ菊花を愛し、後園の花は姬妾よりも可愛らしいと云はれた位である、その位であるから、近侍のものが偶々誤つて枝でも折ると、早速に有罪の宣告を受けるのじや、それで人々

が菊花を見て蛇蝎の様に悪んだそうな、或時、侍臣某誤つて一枝を折る、侯大に怒りて閉門を命ず、某、一枝の花のために人を罪するが如きは決して明君にあらず、何の樂みあつてか生きては仕へんと思ひ、自ら屠腹せんとす、たましく、聖福寺の仙崖和尚その事を聞き、走つて某の死を止め、ある雨の夜、篋笠をつけて花壇に忍び入り、今を盛りと咲き競ふたる菊花を、一本と残さず鎌にて芟り盡した、侯、燭を命じて後園を探らしめたるに、菊の敵は和尚なり、侯、憤怒の餘り、刀をとつて和尚を詰る、仙崖、平然として答へて曰く、花園に悪草あり、其害往々人に及ぶ、我れ天下のためにこれを去るのみ、

侯、大に悟る處ありて、以後は花のために人を責むる事をやめられ

たと、或は小鳥の人を凌ぐを慨したるものもあれば、或は自ら名器の皿を破つて人の心得を示した人もある、天地の間には自由になるからとて、かつてきま勝手氣儘にしてはならぬ事が多いと思はれよ。

○禪家と禁酒

山寺の和尚が一休を學んで寺を出されたと云ふ話がある位で、禪家にも仲く平氣な人がある、また、何か横着なる事さへすれば禪坊主じやと誤解をしてをる人もあるが、佛頂國師は何と示されたか、禪家に飲酒を以て公會の飲食に合せて、少しも忌み憚る慚愧の心無きことは、末法邪禪流布の時よりかよの弊來れり、然るに今の禪家の輩は、其由來を知らず、却つて思ふには、飲酒を戒むることは、律家か或は道心者などのなすわざなり、名山、宮寺は上

代より戒むる事なしと心得て、結句戒むるものをおかしきことゝす、寔まことになげかはしき末法の有様なり、凡そ佛教の中に飲酒の過失三十六あり、文しければ煩く引くに及ばず、縦ひ一々引出して證據し説くも、今時禪僧は是れは教者の事などと云つて、取るべき事ともせずば、禪家の證據二つ三つあげて申すべし、第一、敕撰清規、は禪家普通の法式にして、大唐、日本是れに隨はざるは無し、只今、大德寺妙心寺に、入院、出世、入室、法會等を取り行はるゝと雖ども、此清規に依つて規模とす、此清規の中に、飲酒を以て堅く制せらるゝこと一二にあらず、とて清規の中の沙彌得度の章と書衆の章とを引き、又中峰和の尙語録中にも、四五百人の大衆中一人として飲酒を犯したるものを賤め

ざるものは無かりしとありと云ひ、其外いろくくと例をあげて飲酒の非を示された、此頃でも洞門の寺に至れば、山門先づ掲げて、葦酒門に入る事を許さずと云ふ、門に入るすら猶然り、況や門を越へ、今一つ奥の處に入るに於てをや。

○無言の謙信

上杉輝虎は若い時から禪學に志した人である、偶く越後の春日山に在城の時、近くの林泉寺に益翁和尚と云ふ知識が居られて、多くの坊さんを接化して御座ると云ふので、上杉、或時、和尚を尋ねて、「私も少し禪學がやつて見たいから、何か公案を與けて下されと頼むと、和尚の返答に、

何も人に向つて教へてくれとか頼むとか云ふには及ばぬ、先づお

前の思ふ事を何とか云ふて見なされ、サア、サア、早く早く、毎日、朝から晩まで晩から朝まで、ウムとかスムとか言ふてをるでは無いか、這個聾、

と詰め掛けられて、流石の上杉彈正大弼輝虎も口をグジグジとさせただばかりで、一言も言い得ないで、腋の下からシツポリと汗を流したそうなが、其汗が因縁となつて、和尚の弟子となり、謙信と云ふ法名も益翁が與けたとある、佛法の事でも、禪學の修行でも、サア、實地と云ふ場合には、ウムともスムとも云へ無いのである、花は語らずと雖ども能く蝶を引くとかや、謙信は果して無言の人であらうか。

○裸體の美尼

相州の惠春尼は在俗の頃から、其當時に有名なる美人であつたそう
な、未だ年若き時に深く信ずる所ありて、自ら面皮を焼いて尼僧と
なつたが、生れついて其容姿の絶群なるので、多くの人が戀慕して
止まなんだとある、或時、一人の僧ありて、密かに心情を語り、切
に意に應せよと迫つた、尼の答へに、

それは誠に易いことであるが、恨むらくは君も妾も共に出家であ
るから、尋常の場合で會合すると云ふ譯には行かぬ、それ故にイ
ザと云ふ場合になれば、如何なる危険も冒さねばならぬ、其時に
は却つて君の方から約を破らるゝであらう、

僧曰く、

若し美尼にして、我が情を知り玉へば、如何なる困難も辭する所に

あらず、

既にして樂しき約定は整ふたりと云ふ可きか、偶く尼の肉兄にて
高德の聞へある了庵和尚の上堂あり、遠近の學徒雲の如く集る、時
に尼は裸體のまゝ、突如として大衆の中に出で、高聲に前日の僧を
連呼して曰く、
君と約する所あり、速かに來れ、而して我れに就きて君が欲
を肆にすべし。

其僧大に驚きて答ふる事能はず、遂に恥ぢて日夜參究苦修したりと、
自ら陰門を開展して、「尼が一物は無底なり」と絶叫したる惠春尼に
ありて、この位の事は茶飯前の一小手段である。

○禪味と茶味

吾邦で初めて茶の湯の式を定めたのは大徳寺の珠光和尚である、その珠光に向つて、或時、一休禪師が喫茶の事を尋ねられると、珠光は榮西禪師の喫茶養生記の説を以て答ふ、一休、再び、「道州の喫茶底如何」と問ふ、珠光、默然として答へ無し、是に於て一休は侍者に命じ、茶を運んで珠光に與ふ、珠光の茶を喫せんとするの刹那、一休忽ち喝一喝し、鉄如意を揮つて茶碗を破碎す、珠光驚く色無く、徐ろに立つて拜す、一休、更に問ふて曰く、「喫茶底如何」、珠光、柳緑花紅眞面目と答ふ、一休微笑す、後ち珠光は茶道を紹鷗に傳へ、鷗の弟子に利休あり、利休に至りて斯道大に興りたりと、敢て現時の茶人に問ふ、茶禪は一味か將だ兩味か。

○禪學の大綱

之れ永源寺派管長蘆津實全師の余に語る所也則ち記して求道の人に告ぐ、

不立文字教外別傳は禪宗の大綱であつて、佛々祖々の相承し、以心傳心以て向上の些子を拈提するものは、吾が諸佛頂上の禪より優れるものは無い、初め釋迦牟尼佛が靈山會上に於て、一枝の金波羅華を拈じ玉ひし時に、在坐の聽衆は一人として其意を會したものがなかつた、然るに唯だ迦葉尊者のみありて破顔微笑す、世尊曰く我に正法眼藏涅槃妙心實相無相微妙の法門あり、摩訶迦葉に付囑すと宣給に發端し、それより迦葉は阿難に傳へ、次第に相承して第二十八祖菩提達磨に至りて、大に佛燈を赫かし、弘く心印を傳へて、支那四百餘州の衆生を化し、盛に大乘の佛種を紹隆

した事である、達磨六世の法孫を惠能と云ふ、其門下に南岳青原の二派あり、南岳は馬祖、百丈、黄檗と傳へ、臨濟に至りて大に此道を擴めた、これを臨濟宗と云ふ、青原は、石頭、藥山、道吾、雲岩を経て、洞山に至り曹洞の宗風を盛にした、これが曹洞宗じや、吾邦の臨濟は建仁の千光國師が弘められてより、爾來展轉して二十四流の多きに及び、曹洞は永平の承陽大師これを唱へられてより、其子孫蕃衍して全國に普及す、黄檗は隱元禪師より始まりて、系統亦連綿としてをる、三宗の傳統其釋迦牟尼佛の心印を佩び、達磨大師の別傳を紹ぐと云ふ事は同一事である、これは心を禪要に寄するもの、第一の心掛けなりと知るべし、

釋迦牟尼佛曰く「今此三界皆是我有、其中衆生悉是吾子」大なるか

な心法、心法は廣大にして法界に周遍し、天の高さも覆ふこと能はず、心は天の上に出るを以てなり、地の厚さも載すること能はず、心は地の下に出るを以てなり、日月の明かなるも奪ふこと能はず、心は日月の光に先つを以てなり、かくの如き心法は本來如々として、天地の表に超出し萬物の上に顯然として、造化の主となり天地の祖となりて、宏大悠久圓滿充塞せざるは無し、故に天上天下唯我獨尊と云ふ、此心を體するものを禪宗と稱し、此心に達するものを禪學と唱ふ、故に能く禪學に達するときは、左右その本源に逢ひ、言ふとして禪ならざるはなく、行ふとして禪ならざるはなし、行住坐臥進むも退くも、厠尿送尿、飲むも喰らふも、皆是れ大道にあらざるは無し、これを養ふて能く守るものは、日用性に任せて逍遙し、縁

に随ふて心安く、寸毫の束縛を受けずして活脱自在なり、若し人あつて能く禪宗を體する時は、至る處として自由ならざるはなく、殺さんと欲して殺し、活かさんと欲して活かす、宇宙を手に收め、萬境を掌に歸す、何ぞ自在なる、何ぞ快なる、世尊曰く、「我爲法王於法自在」、臨濟曰く「隨處爲主立處皆眞」、これを以て觀世音菩薩は三十二相處々に身を現じて法を説き、維摩居士はこれを以て佛國土を莊嚴して衆生を成就し、掌大の丈室に八萬四千の座を容れて狹からず、而かも神通自在なり、夫れ居士は衆生の本來空なるを知つて直ちに衆生を濟度し、國土の本來淨なるを知つて直ちに國土を莊嚴す、世法を以て佛事となし、佛事を以て世法を碍げず、八萬四千の塵勞妄想は即八萬四千の清涼解脫なり、夫れ斯くの如くなるときは則ち至る

處是れ道場ならざるはなし、言ふ處説法ならざるはなし、此道や天地に彌淪し、宇宙に磅礴して、處々全眞更らに缺くることなし、眼に在つては見ると曰ひ、耳に在つては聽くと曰ひ、鼻に在つては嗅ぐと曰ひ、舌に在つては談論し、手に在つては執捉し、足に在つては運奔し、意に在つては攀緣す、これを悟るものは佛となり、祖となり、聖人となり君子となる、英雄豪傑も此道より出生す、古の所謂天下に君臨し玉へる帝王も、仁政を四海に施す良將も、威武を八紘に輝す猛將も、皆此道を得て以て群生を安撫し、寰宇を鎮靜す、房玄齡、杜如晦、魏徵、于忠寧等の唐太宗を賛けて輔弼の任を盡せる、郭子儀、顏真卿の大節を唐室に致して其勳を四海に垂る、裴休、李翱の宣宗を佐けて經綸の宏業を奏せる、宋の范丞相、張商英

等の釣軸を握つて率土を料理せる、楊大年、黃山谷、蘇東坡等の翰林に英名を輝かせるもの、皆此道を信受して、これを世間に應用し、能く佛事を成せる者なり、佛法吾邦に東漸してより以來、上一人を首として、王侯將相士庶一般の信仰は他邦に其比類を見ざる所なり、抑々鎌足公、菅丞相の宰輔の任に當りて能く佛教を奉じたる、亦楠公、田公の大義能く南朝の天子を輔けて忠武を後世に貽せる、北畠親房卿の勤王の義を唱へらるゝ、東照公の撥亂反正の偉業を奏せらるゝ、乃至英傑の士天下に稱するものは、多くは佛學に涵養せらるゝを以て能く其徳を全ふするに至れり、其の他文學、工藝、美術、及び百家の佛理より出で、國家の賜を今日に貽すもの寡からざるは、全く公明正大の大道なればなり、經に曰く、「治世產業皆與實相不相違背」

と夫れ斯くの如く禪學の百家に通じ世間に及ぼし 大功あることは悉く數ふるに遑あらず、古人曰く、「道は須臾も離るべからず、離るべき道にあらず」又曰く「造次にも必ず此に於てし、顛沛にも必ず此に於てす」と吾人は此造次顛沛須臾も離るべからざる道を履んで今日に生活するものなれば、豈にこの道の大意大綱を體悉せざるべけんや。然るに世人往々須臾も離るべからざる道と相反するものあるは他なし、無始より以來己れに迷ふて物を逐ひ、妄りに六塵の緣影を認めて、自心とするを以てなり、若し夫れ一朝此妄感を打破して大道と相應すれば、幻化の空身即法身にして、十世古今固より當念を離れず、丹青に獨歩し、宇宙に横行して、死生の間に談笑するの自由を得べし、古人曰く「參は須く實參たるべし、悟は須く實

悟たるべし」と夫れ參究の士は晝參夜請孜々として古人の話頭を提撕して暫時も間斷なければ、工夫純熟して大死一番、峻崖に身を撒して絶後再び甦る底の時節を得て、大道を掌裏に收めん事疑ひあるべからず、切に忌む己れが情量を逞うすることを、初心の學者此道を得んと欲して能はざるものは、全く己れが聰明伶俐のために罣碍せらるゝが故なり、若し夫れ智解の窠窟を一槌下に撃碎了し單々に精究せば、必ず打徹の時節を得て、平生を慶快せんこと火を觀よりも猶ほ瞭かならん、是れ大丈夫兒の事業にあらずや。

○車窓の夢

一日、某の鐵道にて某地に入る、車中客少し、閑なるまゝ將に眠らんとす、偶々、數個の人の來るに會す、刺を通せずして名を知る

ことを得たり、

(其二)

●曰く澤庵和尚

沙門として人に諂ひ、財を貪りて食を美にし、衣を軽くするは愧なり、愧を賣りて以て身を樂ましむるは拙し、己が身を辱むるは、自らなし自ら受くるなれど、佛を辱め法を辱むるは、佛祖の恩を知らざるのである。

●曰く楠正成

國は一人の國にあらずして、國の國なり、故に國の事は大小と無く諸人と共に評定して、善に就て行ふが肝要と思ふ、又曰く、余は常にこのような事を書いて、壁間に掲げた、

おのれの身をよく知れ、極樂を願はんよりは地獄を作るな、身を働かずば食うまじ、樂を好めば苦み多し、譽を求めんより誹を厭へ、珍事にまことすくなし、酒はのめどもものまるくな、立身を思はんより恩を忘るくな、慈悲はするとも代りをとるな、足ることを知りて及ばぬことを思ふな、人はうそ世は無常なり、忠を安んじ死を恐るゝことなけれ、一得あれば一失あり、手がらたてんよりは氣にたがふなものごとくに肝要を知るべし、身のためには身をそこなふなきるものは、寒くないほどきよ、食物は腹一ぱい、おのれがいのちは主のものぞ、わたくしにすつるな、居所は風雨を防がんためのもの、書はよめるやうにかけ、金銀は溜めんより借錢するな、ものいへば聞へるやうにいへ、舌はやらかなる徳に

よつて全し、齒はかたいとかへつて早くそんず、草木は天性に任す、鳥は住食をたくはへぬ故飛行自在なり、人は名利につかわれて一生をくるしむ、すきたることをくやむな、知らぬ事を案するな、禮あつくして人の非をとがむべからず、弓鐵砲あたるが上手、かたなはきれるが重寶、學文するは理を知るが爲めなり、懈怠のものはながく貧なり、人事をいわんよりたのれが非を知れ、俗に家職を先にして後生を次にすべし、僧は菩提ぼだいを専らにして世事を次にすべし、生あるものは必ず滅す、有爲の法は皆無なり、唯一心の要をあんせよ、人間界にあらん人はあへてたのしみをもとめず、苦はいとはす、世の中はかくの如きものとたんのうしておごらす、富めるもうらやまず、貧賤をはぢず、只心は正直にまじはり、五

常を守り、内心には生者必滅會者定離のことはりを不斷、心にか
け玉ふべきなり。

名のために身をくるしむは迷なり、

よき名をとらであしき名をとる、

●曰く豊臣秀吉

我れ過去の戒行拙くして小國の日本に生れ、折角取掛たる異國は人
數不足のため、取り果さるること残念至極なり、就ては大將たるも
のゝ心掛てすべきは、我に侘き近士を擇み、密に我身の目付きに頼
み置きて、時々意見を承り、我身の善惡を聞て、萬事に注意するが
第一である。

●曰く慈雲尊者

大丈夫兒出家したる以上は須く佛智見を具し、佛戒を持し、佛衣を
着し、佛行を修し、佛位に登るべし、宜く純粹の醍醐は飲むべきも
誤て雑水腐乳を飲る莫れである。

(其二)

萬個目前の境涯、喧々囂々たり、車輪か人語か、心靜かにあらざ
れば、耳も眼も、其用を擇ばざるが如し、幽かに認得して、聲の
來る所を知る、

●曰く一休和尚

古は道心を起す人は寺に入りしが、今は皆寺を出るなり、坊主に知
識無く座禪を物憂く思ひ、工夫をなさずして、唯だ衣を着たるを名
聞とす、故に袈裟や衣を着たりとも、衣は繩となりて身をしばり、

袈裟は鐵のしもくとなりて、身をうちさいなむが如く見える、
又曰く、まことの道は、萬事名利を捨て、而かも法度にそむかず、
世にしたがひて過す人、これ佛道成就の人なり。

●曰く松平樂翁

王侯大人、未だ必ずしも智あらざるなり、紅女賤隸未だ必ずしも愚
ならざるなり、一貴一賤は命なり智愚何ぞ預らむや、是を以て古の
明君は、己れ王侯威を以てして、能く賤大の言を受く、紅女賤隸と
雖も、若し能く我を諫むる者あれば、之れ取るべきは至當である。

●曰く松尾芭蕉

余が行脚の掟の中に

一 一宿なすも、故無きに再宿すべからず、樹下石上に臥すとも

あたゝめたる筵と思ふべし、

一 衣類、器財、相應にすへし、過ぎたるはよからず、足らざる
もしかず、

一 人の短をあげ、己が長をあらはすことなかれ、人を謗りて、
己にほこるは甚だ賤きことなり、

ついでにわれの句を

○やがて死ぬ景氣は見えす蟬の聲、

○年暮れぬ笠着て草鞋はきながら、

○花の雲鐘は上野か淺草か、

●曰く道元禪師

さとれるものは、戒法正しく、物我無く、大悲圓滿にして、もろく

を救へり、淺ましきかな末世の法は、俗家をたぶらかし、時にあえるに心をよせ、時に合はざる人ありと雖ども、かつて見ることに無く志の法に深きものありと雖ども、己れに誠心なければ是を見ることなし、今の法は俗家の世渡りにもをとりて淺まし、世間の世渡りする業を見れば、爲すことありて、取ることあり、これには遙にをとれるは、此頃の佛者の有様なり、眼をさまして、佛の眞理を辨へ向の上の大路に向ふが肝要である、

又曰く、後嵯峨天皇より紫衣を賜ふたことがある、余は三度まで辭退申上た、然るに帝は許し給はざりし、それ故に恐れながら受け奉つた、其後紫衣は深く藏めて、着用しなかつたが、一つの偈がある、
「永平雖谷淺、勅命重重々、却被笑猿鶴、紫衣一老翁。」

●曰く勝海舟

余が亡友山岡鐵舟を吊ふた辭は、
塵世の流轉究りなし、誰か其限を詳にせん、其中遁れ難きものは唯一死のみ、賢達と至愚と雖も一朝閉目せば萬念空寂、達人は然らず、身死するも偉蹟百世に彰はる、嗚呼可憐の塵世、君、世變に當つて幹旋周密、策に違算なく、清爽の心膽を以て勇剛の氣象を吐露す、萬象其澤を蒙り、舊主長へに泰然たり、今不幸にして大患に罹るも疾くに生死を忘る、況や痛苦をや、一笑して泉下に去れ、(悲哀の情は面に溢れ、斷續の聲あれど聞くに忍びず)

●曰く武田信玄

人は遠慮の二字は肝要なり、遠慮さへ有れば、分別にもなるなり、

子細は遠慮して、我分別の及ばざる所をば、大身者は家臣に尋ね、小身者は一類朋友に談して事を成せば、落度少し、去る程に分別の元は遠慮なり。

●曰く上杉謙信

武邊の働は武士の常なり、百姓の耕作に同じ、武士は唯だ平生の作法能く、義理正きを以て上とす、武邊の働き計りを以て、知行を多く與へ、人の上となすべからず、

●曰く白隠和尚

一人の心は千萬人の心なるが故に、遂に天下國家に及ぼし、上、王化を佐け、下庶民に利せん、然らば則ち宇宙間に於て、那個の盛事が是に如かんや、これ老僧が平生の微志なり、

又曰く、今日われくは、雨にももれず露をもうけず、一日たりとも、食なく暮したることなく、一夜とて裸でねた事もないは、如何なる果報ぞや、世の爲めになること、ては、一文がとこもした事なく、世界の邪魔になる事は大分覚えもある事よ、我のみならず、親や子や夫婦兄弟一家の内に飢ゑず凍ゑず過すことは御先祖父母の御めぐみである。

●曰く傳教大師

貧は菩提の種なり、日々に生死を厭ふ、富は地獄の使なり、夜々悪業を増長す、道心は出離の翼なり、速に九品の蓮臺に飛ぶ、名利は輪廻のきづなり、能く三途の鐵網を結ぶ。

(其 三)

借問す、大聲を聞き得るの耳は生理上如何なる關係を保つか、又疑ふ、現下の社會に於て、多くの人の鼓膜は何れの種に屬するの聲を要求しつゝあるかを、兩個の疑團今や將に氷解し盡さんとするの一刹那、夢魂飛で忽ち他の聲中に入るが如し、

●曰く夢想國師

佛神に今世の事を祈り求るは、例へば國主に紙一枚を所望するが所領を望まざるや、何ぞ佛神に無上菩提を求めざるや、又曰く、我身を忘れて衆生を利益する心を起せば、大悲内に薰して佛心を冥合す、放に一身のために修せずと雖ども無邊の善根自ら圓滿す、みづからのためとて佛道を求めざれども、佛道速に成就す。

●曰く石川丈山

理を知りて勢を知らざれば大事を行ふ能はず、勢を知つて理を知らざれば大謀を立つる事能はず、必ず理勢の二つを兼ね明めて而して後事を行ふべし。

●曰く北條時頼

わがよき人には善くあたり、あしき人にはあだをなさんと思ふ事、世間の人の常に思ふ所なり、犬でさへ、愛する人には尾をふり、さあらぬをばほるいがみ候、然るに今たましく人身をうけ、まれに内典外典のことわりを聞きながら猶この心を改めずば、誠に畜類にひとしき身にて候。

●曰く千代女

三界唯一心の意は

○百姓や、蔓一すじの、こゝろより。

●曰く源信僧都

飢て食を思ふが如く、渴して水を追ふが如く、或は頭を低れ手を擧げ、或は手をあげて名を稱ふ、信念常に存して念々に相續し、寤寐にも忘るゝこと莫れ、

●曰く佐久間象山

吾歳三十にして一藩の人たることを知り、四十にして一國の人たることを知り、五十にして五世界の人たる事を知る

●曰く親鸞上人

親鸞めづらしき法を弘めず、だゝ如來の教法を吾れも信じ、人にも教へさかしむるばかりなり、

●曰く木村長門守の室

夫が大阪の役に當りましたのは、妾が十八歳の時でありました、其時夫に送りました手紙は、

一樹の蔭かげ一河の流れ、これ他生の縁と承り候にこそ、そをもと、せの頃よりして、偕老の枕をなして、只影のかたちかたちに添ふが如く思ひ參らせ候、此頃うけたまはり候へば、此世かぎりの御催しのよし、かけながら嬉しくまゐらせ候、唐の項王とやはは、世に猛き武士なれど、虞氏のために名残りを惜みを、木曾義仲は、松殿の局に別れを歎くとやら、されば世に望み窮りたる妾が身にては、せめて御身御存命のうちに最後いたし、死出の道とやらにて奉待上候必々秀頼公多年海岳の鴻恩御忘れ無き様願上まゐらせ候荒々

めでたくかしく、

●曰く大久保利通

方今國勢日に開明に進むの形ありて、而かも人民の生理月に凋耗に至るの實あり、是れ誠に痛心焦慮すべきものなり、苟くも時に應じて匡救の方を講せず、徒らに開明の虚名を恃みて、凋耗の實害を蒙らば、其禍將に究極する所無るべし。

●曰く二宮尊徳

凡そ物の不足は、皆覺悟せざる所に出るなり、されば人と平日の暮し方へ大凡そこの位の事にすれば年末に至つて、餘るとか、足らぬとか、知れぬと云ふ事なし、然るにこゝに心付かず、うかくと暮して大晦日に至りて始めて驚くは愚の極なりと知れ。

●曰く陀阿上人

家の棟を焦す火は目に見えて恐しく、人の胸を焦す火は目に見ずして恐しく、何れも分別の水を以てしづむべし、水は智に表す、智、愚を消するの理りなり、然れども、胸の火風強き時は、智水も湯となり又浪となる、

のどかなる水にては、色も無きものを、
風のすがたや、なみと見ゆるむ、

(其 四)

八面玲瓏たる天地に住し、其麗かなるや鏡花を欺き、其清らかなるや水月を凌ぐと知りながら、直き道に向つて進むのは寸毫だに無く、徒らに私見私情に驅られて、天與の職責を抛却し以て自家の

珍を顧るの暇なく濁浪滔天の所に出沒變幻して、空しく佛祖に責負しつゝある底の人のありや否やは問ふ事を休めむ、吾人は別に願輪快く轉して間斷なく吾人を導きつゝある或物を求めんと欲して夢中に覺者を尋ぬるの時、天地意あつて車窓寂たるが如し、

●曰く洪川禪師

余は儒門に生れ、中年まで佛教と知らなかつたのである、然るに一日大に感じた、成る程佛の教へ玉ふた通り、この世界は苦の集りである、加之、無常の殺鬼は何時來るやら更に不分明ぢや、いでや此上は佛祖の面目と明めて、人と生れて來たゞけの任務を盡したいと決心して、幾度か出家を請ふた、然るに父は仲々承知をして呉れぬ、止むなく一夜、妻には左の離別狀を遺して家を出て、直ちに京都の

相國寺へ入れたのである、

汝と我とは猶糸を以て土人形を繋ぐが如し、今糸きれて我は山に入る穢土厭離狀扱て件の如し。

●曰く菅原道眞

余は筑紫觀音寺にて鐘聲を聞て、
反、覈、何、遣、恨、辛、酸、是、宿、緣、微、々、抛、愛、樂、漸、々、謝、葷、臙、合、掌、歸、
依、佛、廻、心、學、習、禪、

●曰く隆盛の母

妾は常に子供に教ゆるに、
我、日、の、本、の、武、士、道、は、誠、を、以、て、本、と、な、し、親、に、は、孝、君、に、は、忠、兄、弟、
は、睦、き、を、肝、要、と、な、す、假、令、鼎、を、お、げ、虎、を、搏、つ、の、武、勇、あ、る、も、誠、の、一、字、

を、忘、れ、ば、不、忠、不、孝、の、人、と、な、ら、ん。

●曰く弘法大師

夫れ病なくば薬なし、障りあれば教あり、妙薬は病を悲みて興し、佛法は障りを愍んで顯る、この故に聖人の世に出ること必ず悲慈に由る、大慈は樂を興へ大悲は苦を抜く、抜苦興樂の本は源を防ぐに如かず、源を防ぐの基は教にあらざれば能はざるなり。

●曰く水戸黄門

余が娑婆の掟は、

此世は客に來りたるなれば義理あるべし、心に適ひたる食事に向ひては善き馳走に逢ふたと思ひ、心に適はぬとても客なればほめて食はねばならず、夏の暑さもたしなまねばならず、冬の寒きに

も客なれば堪へねばならず、腹立つことも客なればにつことして居らねばならず、小家なりと雖ども不足云ふ事ならず、衣類きたなくも客なれば堪忍せねばならず、親子兄弟召使者まで客なれば挨拶よく暮し、心を跡に残さず御假申すべし、
父母に召はれて假に客に來て、
心のこさず歸るふる里、

●曰く前田利家

我亂世に生れ、此所彼所の戰場に趣き、敵するものは殺すと雖も、故無くして人を苦めず、然らば何の罪あつて地獄に陥らんや、若し冥土に於て、牛頭馬頭我等を侮り、猥りに呵責せんとあらば、先年より世を去りたる當家の勇臣數多あれば、彼等を前後に従へて、鬼神

を攻め靡け、武威を黄泉に振ふべし、

●曰く覺鑿上人

遊戯笑語徒らに年を送り、諂誑詐欺して空しく日を過ぐ、善友に隨はずして痴人に親み、善根を勉めずして悪行を營む、利養を得んと欲して自徳を讚し、勝徳の者を見ては希望を起す。

●曰く馬場辰猪

予は未だ老親を養ふに十分の財あらず、今若し妻子を有せば徒らに係累を増すのみ、國家前途の形勢を案し來れば、盤錯縱横して禍難測られざるもの多きが如し、微軀敢て國の許とに當りては、鼎鑊の奇禍亦敢て避る所にあらず、予今單獨の身を以て猶且つ朋友を煩すこと多きに、更に妻子の累を遺すが如きことありとせんか、雷に朋

友に對して心苦きのみならず亦以て妻子に悲みを與ふべし。

●曰く西行法師

紅虹たなびけば虚空色とれるに似たり、白日かゝやけば虚空明かなるに似たり、されば虚空はもと明かなるものにあらず、又色どれるものにあらず、又この虚空の如くなる心の上に於て、種々の風情を色どれるといへども、更に蹤跡なし、この歌則ち是れ如來の眞形體なり、

又曰く、生死の長き眠いまた醒やらで、夢にのみほだされつゝ、水の面の月を實と思ひ、鏡の内のかげをげにと深く思ひ入て、あけくれ唯だ忘念の心のみうちつゝいきて、生死の船をよそへずして、屠所の羊の歩は、我身の外にもてはなれ、鳥部舟岡のけむりをよそにみ

て、過にし方四十餘年の霜をいたゞき、行末しらずやけふしもやあるらん。

(其 五)

春は花を枝頭に尋つて春を忘れ、夏は涼を樹蔭に追ふて夏を知らず、秋の月、冬の雪、風に執するにあらざれば兩に着するなり、曰く法性等流の本源、曰く信念の修養、これ果して幾許個の人に顧られつゝあるか、試みに三々五々其集る所に向つて耳を傾けよ、自を讃するにあらざれば他を譏るに似たり、切に思ふ靈性の樞機を與るの人、那個の消息に向つて如何に心梢を拈せられつ々あるか、願くは吾人、志を佛陀の光明裡に集め、思を烈祖の芳躅中にとめて、自ら夢中の人たることを知ると共に、夢の眞形體を捉へ

むことを矣。

●曰く榮西禪師

余が日本佛教中興願文に、

我國たと縦たひ法藏に富むも何ぞ復た一句の墜を悲まざらんや、況や深法時を逐ふて漸く淺近となり、廣學人に隨て稍々薄解となる、再び分解に隨ふも皆名利に隨ふ、永く大事因縁を求めず、或は自ら知人と稱し、而も道心に於て有ること亡なきが如し、就中律藏澆季離の時、梵行の比丘跡を削り福田衰弊の時人天思全く少く、之を謂はんと欲すれば則ち害せらるべく將に謂はざらんとすれば亦知を欲すとなす、之を爲如何、説默共に煩し、進退維れ谷まる、但だ一身の凌辱を忘れて、三寶の恩德に報い、佛法者の根源を知る、抑も

又如來の本意にあらずや、我土の衆生善知識何ぞ贊助せざらんや、庶幾くは輔相知臣心を此願文に留め、今奏問を經、中興の叡慮をめぐらし、佛法を修覆するあらば最も望む所なり、小比丘の大願唯中興の情なり、誰か復た思議せざらんや、

●曰く西郷隆盛

命もいらす、名もいらす、官位もいらぬ人は始末に困る者なり、この始末に困る人で無くては、艱難なんなんを共にし國家の大業を成就する事は出來ないのである、

又曰く、變事俄かに起る時に動搖せず、從容として其變に應ずるものは、事の起らざる以前に定まらずんばある可らず、變起らば只だそれに應ずるのみなり。

●曰く蓮如上人

王法は額にあてよ、佛法は内心に深く蓄たくはへよ、との仰せに候、仁義といふ事も端しくあるべきことなるよしに候、

●曰く徳川家康

古法を守り我物數寄せず、是眼の堪忍なり、美香を如まず、穢はしき匂ひにもをかされず、是鼻の堪忍なり、雷又戰場にて弓鐵砲の音にも恐れず、先陣に進みて高名を遂る是耳の堪忍なり、酒を過さず美味を食せず、是口の堪忍なり、其外手足にも堪忍あるなり、右堪忍を一生の間全く守る人は、大身は家を興し國を修め、小身は身を立て家を修む。

曰く〇〇子、

○見、かけ、を、ば、立、派、に、か、さ、る、世、の、中、に、

み、へ、ぬ、心、の、底、を、か、さ、れ、や、

○我、と、云、ふ、狭、き、心、を、捨、て、見、よ、

ひ、ろ、き、世、界、に、障、る、も、の、な、し、

曰、く、車、窓、の、人、

六、道、の、ス、テ、ー、シ、ョ、シ、に、輪、廻、の、車、

汽、笛、聲、な、り、天、上、か、地、獄、か、

(待合室にて認む)

●歌の教訓(その二)

檀 林 皇 后

人王五十二代嵯峨帝の后なり、篤く禪法を信じ、唐の

義空禪師を擅林寺に迎へて法要を尋ね、遂に得る所あ

りて此歌を詠じ玉ふ、嘉祥二年壽六十五にて崩じ玉

ふ、

もろこしの山のあなたにたつ雲は

こゝにたく火のけむりなりけり

(その二)

楠 正 成

公の事は人能くこれを知れり、平常心を禪に寄せ、大
燈、關山の諸師に參し、最後に明極禪師に見へ、一喝
の下に徹底したりと、後醍醐帝、この歌をきこしめし

て古今の軍歌と稱し玉へりとぞ、
仁と義と勇にやさしきものよふは

火にさへやけず水にをほれず

(その三)

○ 芭蕉翁桃青

俗稱は松尾甚四郎、俳諧を以てその名高し、臨川寺の
河南禪師に參じて、教外別傳の旨を得たり、元祿五年
十月十二日難波の客舎にて卒す、春秋五十一、
佛法は障子のひきて峰の松

ひうち袋にうぐひすの聲

(その四)

○ 盤珪國師

十二歳の時、儒者の大學明德の章を講ずるを聞き、心
に疑ふところありて、深く直指の宗を求め、出家して
愚堂、了庵等の諸師に仕へて遂に悟入し、大に道俗を
化す、元祿六年九月三日示寂す、

さしむかふ心ぞきよき水かゞみ

色すきもせず垢すきもせず

(その五)

○ 如大禪尼

初めの名は千代、金澤越後守が妻なり、夫に別れてよ
り、心を禪門に寄せ、佛光國師を拜して薙髮す、一日

縁にふれて大悟しこの歌を詠じたりと、洛北に庵を結ぶ、今の真如寺是れなり、永仁六年十一月廿八日化す、
壽七十六、

とやかくと工みし桶かひの底ぬけて

水たまらねば月もやうず

(その六)

○ 澤 庵 和 尙

但馬出石の人なり、元和上皇其徳をしたい、しばく宮に召して心要を求め玉ふ、正保二年十二月十一日遷化す、世壽七十三、

佛法と世法は人の身とこころ

ひとつかけてもたぬものなり

(その七)

○ 道 元 和 尙

久我通忠郷の子なり、十三にして出家し、後ちに宋に入りて、天童如淨禪師に法を得て歸り、盛に道俗を化し、我國曹洞宗の始祖として世に知らる、建長五年八月廿八日寂を示す、世壽五十四、
水鳥のゆくもかへるもあとたへて
されども道は忘れざりけり

(その八)

○ 内大臣 實 隆 公

永正年中の人にして、其名和歌に高し、ある女房の坐
禪のころを問いし時に、この歌をよみて答へ玉はじ
とあり、

をしへぬにわれから我とこゝろへて

戀をぞ人のならふものかは

(その九)

○ 雲 居 和 尙

初め大徳寺に入つて剃髪し、後妙心寺に出世して松嶋
の瑞岩に住す、萬治二年八月八日示寂す、世壽七十七、
もの毎に執着せざるこゝろこそ

無念無想の無住なりけり

(その十)

○ 大 燈 國 師

大應に參じて單傳の妙旨を得、或は居を洛外に卜し、
或は四條橋上にてゆきゝの人をみ山本にと歌ふて動中
の工夫に妙趣を探ぐり、後ち大徳寺を開きて出世住山
す、花園、後醍醐兩帝の歸依を蒙りて道風大に傳ふ、
建武四年十二月廿二日示寂す、世壽五十六、
三十余りわれも狐の穴に住む
今化かざるゝ人もことわり

(その十一)

○ 面 山 和 尙

幼にして古峰の凄雲に投じて得度す、壯なるに及びて諸方に善知識を求め、遂に太源下の法を嗣ぐ、明和六年九月十二日若州の永福庵に化す、壽八十六、ひと口にのみたる水のつめたさを

人問ふともいかゞ答へん

(その十二)

○ 利 休 居 士

姓は田中後に千氏と改む、薙髮して宗易と號し、別に抛筌齋と稱す、若き頃茶を武野紹鷗に學び、又古溪禪師に參じて禪關をたゞき、風流を茶禪の間に盡す、豊臣公に召されて利休居士の號を賜ひ、且つ若干の領地

を拜す、後故ありて自殺す、時に天正八年なり、

心だに岩木とならば其まゝに

みやこのうちも住よかるべし

(その十三)

○ 佛 國 國 師

後嵯峨帝の皇子なり、十六にして聖一國師によつて落髮し、兀庵、無學の諸師に就て參禪辨道し、後に下野にありて大に祖風を揚ぐ、正和五年十月廿日示寂す壽

七十六、

折得ても心ゆるすな山櫻

さそう嵐あらしのありもこそすれ

(その十四)

○ 夢 窓 圓 帥

曆應二年足利尊氏天龍寺を營み、師を請して開山とす、七朝の天子、師を崇し玉ふを以て、世に七朝國師と稱す、觀應二年九月三十日寂を示す、世壽七十六、いづくより生れくるとも無きものを

歸るべき身となになげくらん

(その十五)

○ 徹 書 記

永享年間、東福寺にありて書記たり、天性和歌を好みて其名高く、時の人稱して定家卿の再來と呼びしと、

出るとも入るとも月を思はねば

こゝろにかゝる山の端も無し

○ 白露のすがたをのが姿を其まゝに

もみじにをけばくれなひの玉

(その十六)

○ 萬里 小路 藤房 卿

後醍醐帝に仕へて忠功あり、後ち直諫の用ひられざるを慨し、ひかにのがれて薙髮す、曆應の初め開山國師に參し、本有圓成の話によつて大悟す、則ち妙心二世授翁禪師これなり、康曆二年三月廿八日化す、世壽八十五、

吹く時は音さわがしきやま風も

吹かざるうちは何となるらん

(その十七)

○ 一 休 和 尙

平民的教化を以て一代の任務となし、賤女しづが伏戸の隅までも盛んに禪風を擧げ、天明十三年十一月廿一日大徳寺に化す壽八十八、

○

佛とは何をいはまつこけむしる菩提

慈悲より外にしくものぞなき

○

慈悲の眼めに悪くしと思ふものぞなく

罪ある身こそなほあはれなれ

(その十八)

○ 東 嶺 和 尙

初め古月、翠岩の門に遊び、後ち白隠和尚に隨侍して、遂に老師平生の受用底に徹し、伊豆に龍澤寺を開いて白隠を開山とし、自ら其二世に居して宗風をつぐ、寛政四年閏二月十九日化す、壽七十七、
あらわれて鏡にものはうつれども

中くいろはわからざりけり

(その十九)

○ 中 將 姫

藤原の豊成の女なり、幼にして母を失ひ、繼母の酷遇にあふて人生の無常を感じ、遂いに身を佛門に歸し、法を求むるの心誠に深かりしと、天應元年廿九歳にて歿す、

なか／＼に山の奥おくこそすみよけれ

草木は人のよしあしをいはねば

(その二十一)

澤 水 禪 師

珠光禪師に見へ酬答相契ふて印記を受く、江戸にありて大に僧俗を化度す、元文の末年壽百六十余歳にて化

す、

何事もいふべきことはなかりけり

とはで答る松かせのをと

(その廿二)

○ 玄 虎 藏 主

崇芝禪師の法を嗣ぎて伊勢の淨眼寺に住す、一日、皇大神宮神遊して師の大戒を受け玉ふと傳ふ、永正二年七月廿三日の寂す、

われも無く人もなきさのうつぼ舟

月ばかり乗るとみへけり

(その廿三)

○

蜷川親當

二百七十

北面の武士なり、文才あつて和歌をよくす、一休和尚に參じ誰の話に悟入す、和尚と道交深く、禪餘の談多く世に知らる、

生れぬるこの曉に死しぬれば

きふの夕は秋かせぞふく

○

そのつま

あさ糸の長しみぢかしむつかしや

有むのふたつにいつか放れん

(その廿三)

○

梅天禪師

豊後杵築侯の臣にして智勇のきこへ高き人なりしが、心を禪要に寄せ、遂に出家して、白河寺、慈眼寺を開き、大に道俗を導く、延寶丙辰五月二日化す、壽七十、
稻妻いなづまのかげにさきだつ身を知れば
今見るわれにあふことも無し

(その廿四)

○

法燈國師

初め東大寺に入り、又高野に密法を學ぶ、後渡宋して無門禪師の印記を受けて歸朝し、禪灯を南海の濱に闡揚す、永仁六年十月十三日世壽九十三にして化す、何事も焚まぼろしと悟りては

二百七十一

うつゝなる世の住居なりけり

(その廿五)

○ 北 條 時 頼

大覺禪師に參じて禪機を探り、後元庵和尚の言下に契悟し、祝髮して最明寺道崇と號す、民の苦樂を察し、ひそかに出て、諸國を行脚し、鎗倉に歸りて仁政をし、弘長三年十一月廿二日端然として卒す、

心こそころまよはす心なれ

ころろに心ころゆるすな

○

いくたびか思い定めて替るらむ

たのむまじきは心なりけり

(その廿六)

○ 拙 堂 和 尙

常に無心の歌に禪味を加へて大に世を警む、一夜紫玉笛を拾ふと夢みて別號を紫笛老人と稱し、明和の末年大坂の某寺にて化す、

八百のうそを上手にならべても

誠ひとつに可かはざりけり

○

すべきことたたづける氣は善所なり

せずにくきはいつもくるしむ

(その廿七)

○ 中納言光廣卿

志を禪門に寄せて春屋、澤庵の室をたゞく、後一絲和尚に參じ、趙州無字の話に於て豁然として、疑團を打破す、寛永十五年七月十三日薨す、
されはとてさめすもあればまよひ來て

とても夢見るこの世なりせば

(その廿八)

○ 天 桂 和 尙

あまねく濟洞の知識に參じ、佛心宗の蘊奥を得て盛に化を布く、晩年難波に藏鷺庵を開き、隱栖し 自ら老

螺蛤と稱し、又年八十八に及びて老米虫と稱す、其年の十二月十日示寂す、時に享保廿年なり、

佛とは誰がむすびし白糸の

しづのをだまきくりかへしみよ

(その廿九)

○ 楠三郎兵衛正勝

楠正儀の末子なり、教外の妙旨を求め、諸方の宗匠に參じて心要をたゞく、或時僧虚風に見えて虚鐸の音を學ぶ、今の尺八これなり、そもく歩音は唐の普化禪師に始まり、法灯國師入宋して我朝に傳へ國師より虚竹を経て虚風至る、士またこれを経て名を虚無と改む、

世の人これより此徒を稱して虚無僧と云ふ、
笛竹の聲のあるじを尋ねれば

地水火風の四大なりけり

(その三十)

愚 堂 和 尙

花園の庸山和尚に見へて大悟の境に達す、當時諸方の
禪者餘技にふけつて祖師の真風を忘る、師や能く關山
の遺風を起し、遂に元和帝の崇信を蒙るに至る、寛文
元年十月一日寂を示す、壽八十、
あし原やたへてひさしきのりの道を
ふみわけたるは此翁かな

(その三十一)

○ 月 坡 禪 師

太源和尚の法孫にして自ら老臥佛と稱す、大事究明の
後は加州の天徳院に住して道俗を導く、月坡は別號に
して名を道印と云ふ、

そめねどもをのがいろくをのづから

松はみどりに雪は白妙

(その三十二)

○ 武 田 信 玄

武田大膳大夫晴信、剃髮して入道信玄と云ふ、元龜天
正の頃群雄割居の時に際し、羈を甲州に唱へ大に上杉

氏と戦ふ、その戦術の工みなる前後其比を見ずと云ふ、
夙に別傳宗を信じ、禪と武と圓轉活脱の妙を得たる亂
世の一英雄として世に知らる、
人は城人は石かき人は堀

情は味方あだは敵なり

(その三十三)

○ 榮 西 禪 師

初め台密の温奥を究め、後宋國に入り虚庵禪師の法を
得て歸朝し、建仁、聖福、壽福の諸寺を開く、是日本
禪宗弘通の始めなり、建保三年七月五日示寂す、世壽
七十五、因みに云ふ、茶の實を採り來り初めて筑前の

セブリ山に植へ且つ喫茶養生記を著して其の功を賞す
本朝茶を用ゆる事も亦師に始まると、
奥山の杉のむらだちともすれば
をのが身よりぞ火を出しける

(その三十四)

○ 鈴 木 正 三

正三とは俗稱なれど、其まゝ用いて法號となす、心性
を看破するの後、法旆を關東にあぐかつて萬邊の大珠
數をわがめ、其上に座して工夫したる事多かりきと、
駿府の林泉庵にて化す、
さしいづる鋒をれよ物毎に

をのが心をかなづちとして

(その三十五)

○ 法 心 國 師

徑山の無準和尚に參するの時、準圓相の中に丁の字を書して示す、師會せず、工夫三昧にある事九星霜、遂に悟入して歸り高價遠く傳はり、盛に禪風を東北に起す、

足なくて雲のはしるもあやしきに

何をふまへて霞たつらん

(その三十六)

○ 遂 翁 和 尚

白隱の輪下にありて參究の功を積む、一日桑名を渡るに、風荒くして舟くつがへり、乗人悉く溺死す、師ひとり海底に坐禪して動かす、然るに口又は鼻等より水入るなし、暫時にして他の舟に救はれて、恙無き事を得たりと云ふ、寛政元年十二月廿日化す、壽七十三、うかくと月日をすごす修行者を

井づゝの上の茶碗とやみん

(その三十七)

○ 無 住 長 老

聖一國師に參して大事を得す、かつて尾州に長母寺をひらきて禪密の二宗を弘通す、時に熱田明神示現して

師の徳を稱し玉いしと云ふ、後伊勢の蓮華庵に移り、
正和元年十月十日死す、

くもりなき心の月はむかしより

待をしむべき山の端もなし

○

世の中はあるにまかせてあられけり

あらんとすればあられざりけり

(その三十八)

○

鐵 眼 禪 師

初め一向宗の僧はりしが、事をすて、黄檗に登り、木
庵和尚に師事して直指の旨の得、攝津に瑞龍寺を開創

し、一身を教化に任ず、

釋迦あみだ地藏やくしと名はあれど

をなじ心の佛なりけり

(その三十九)

○

一 路 居 士

仁和寺一代の門主たりしが、左海に閑居するの日、一
休和尚に見ゆ、一休問ふて曰く、萬法道あり如何なる
か是れ一路、居士、言下に萬事休すべし如何なるか是
れ一休と答ふ、これより互に往來して、禪機を拈じた
りしと、

月やみむ月にはみへずながらへて

うき世をめぐる影もはづかし

(その四十)

○ 白 隠 和 尙

正受老人に見へて、身心を打破するの處に獨妙の神機を捉らへ、大に宗風を振ふ、其篋下より出づる禪傑十余入、和尙は實に禪門の中興と稱すべし、明和五年十月十一日寂す、世壽八十四、山居せば吉野の奥のそれよりは

隻手の聲やふかきかくれ家

(その四十一)

○ 佛 德 禪 師

嘉曆年間、敕を奉して南禪寺に住す、然れども都の熱鬧を避け濃州の虎溪山に入る、正慶元年七月四日化す、壽五十一、

ふればまづつもらぬうちに吹捨て、

風ある松は雪をれもせず

(その四十二)

○ 大 愚 和 尙

初め智門禪師嗣にぎて南泉寺に住し、門前の婆子の心要を尋ぬるに遇ふて後大に志を決し、寺を出て參州順瀬の山中に入り、又江州の圓鏡にとゞまりて、日夜鍛練怠り無く、遂に大事を窮めて、祖風を宣揚す、寛文

九年七月十五日越前大安寺に化す、壽八十六、

まれば迷ひ知らねばまよふのりの道

何か佛のまことなるらん

(その四十三)

○ 一 絲 國 師

澤庵の室に入つて深く直指の旨をたゞく、一日大惠普
説を讀み、忽然として大悟す、愚堂和尚の印可を得て
大に宗風を起す、靈源、法常の二寺を開き、又江州の
永源寺に至りて寂室の道の中興す、正保三年三月十九
日寂す、壽三十九、

梅が香をさくらの花に匂はせて

柳の枝にさかせしかな

(その四十四)

月 庵 禪 師

峰翁禪師を禮して得度す、後大虫岑公の印記を受け、
大明、圓通、大同、禪昌等の諸刹を開き、懇ろに山陰
の僧俗を化す、康應元年三月廿二日寂す、壽六十四、
枯果てしかも花さく梅が枝に

聲をも立てず鶯の啼く

●佛教信徒の家憲

圓覺建長兩寺管長 釋 宗 演

堅かたく特しん信ねん念をちし一 篤あつく敬さん三 寶ほうをけいす一 佛ほとけ是これ汝なんじがい意

法ほうは是これ汝ちんじがくち口 僧そうは是これ汝なんじがみ身 生なんじをしよづるものはふは汝なんじがみ父 母

護なんじをまもるものはこくわう汝なんじをたすくはしゆじやう國 王 輔なんじをたすくはしゆじやう汝なんじをたすくはしゆじやう衆 生 教なんじをたすくはしゆじやう汝なんじをたすくはしゆじやう正 法

希ふ施せい如てのごとし手 特ち戒かいはしあしのごとし如 足 忍にん辱にくは維これ腰こし

精しやうじんは進これ維のう腦 禪ぜん定じやうすなはちこころ即 心 智ち慧えはすなはちまなこ即 眼

三さん歸き四し恩おん並ならびにろく與ど六 度と 是これをふつとかいていのけんとなす為これ佛これ徒これ家これ庭これ之これ憲

修養禪話の巻尾に書す

物質的文明を謳歌せるの時代は去れり、科學萬能主義に心酔せるの時代は過ぎたり、一般國民は今日の所謂智的教育によりてのみ満足する事能はざる程度まで進歩せり、吾人は國民將來の發展を以て、疑も無く心靈上の思索にありと確信す、切實なる求道の士、眞摯なる心靈の修養者、日に月に多きを加ふるの一事、又以て吾人の確信を誤らざるを證するに足るにあらずや、物窮すれば必ず變ず、智的教育によりて宗教を度外視せる國民は、今や却つて宗教を求むるに汲々たり、吾人は寧ろ變轉

常無き時潮の推移に驚く、
 時代の要求既に斯の如し、心霊修養の指導者を以て自ら任ずる宗教家たるもの、徒然として坐視傍觀すべきの時にあらざるなり、道友後藤北溟君、大に茲に見る所ありて、應機接物の餘、修養を以て終始せる幾多の諸英傑の芳躅美事を傳へ、傍ら自個の所信を述べ、題して修養禪話と云ふ、予は今の時に於て此書の出づる、豈に啻に大旱の雲霓を望むの思ひに止まらざるを信ずるものなり、切實なる求道の士眞摯なる心霊の修養者、此書によりて胸中の苦悶を除き得る事、予の疑を容れざる所なり、看よ、禪門特得の活手段は、談笑の間自ら紙面に躍

如たるを覺ゆ、近日上梓せらると聞き、聊か所感を記して蛇足となすと云爾。

明治三十六年楓紅蘆白の秋

山形市 角張月峰

24/3/38

明治三十七年二月二十七日印刷

明治三十七年三月五日發行

定價廿五錢

著者 後藤北溟

東京市神田西紅梅町十番地

發行者 平本正次

東京市神田區表神保町二番地

印刷者 三島宇一郎

全所 (電話本局二三一六番)

印刷所 弘文堂

不許轉載

發行所

東京市神田區西紅梅町十番地
(電話本局二千九百九十九番)

光融館

光融館出版書籍地方大賣所

熊大博	同廣	同備	同後	同島	同町	同二	同阪	同條	同六	同五	同條	同油	同小	同三	同條	同京	同岡	同岐	同同	同同	同同	同名	
本分多	島	町	阪	條	條	條	條	條	條	條	條	路	條	條	條	崎	阜					古	屋
長甲積	洗積	吉柳	吉寶	柳村	法爲	顯興	出貝	伊郁	其文	永川													
崎斐	善心	善岡	原喜	田兵	文枝	上勘	道藏	雲葉	藤小	藤文	東瀨												
次治	館支	館支	平兵	書兵	書兵	書兵	書書	書書	書書	書書	書書												
郎平店	房店	助衛	店館	軒衛	館館	院院	院院	店院	司堂	堂堂	堂堂												
同同	橫龍	同札	弘仙	新松	甲長	三水	長富	高小	小金	同同	同同												
	濱野	幌前	臺瀉	本府	野野	條原	岡山	岡松	澤														
勉弘有	伏振	富今	藤北	高朝	西榎	西目	中學	宇宇	日平	酒品													
強集	隣見	進貴	泉崎	美陽	澤喜	口村	黑田	都宮	都宮	澤新	井安	川太											
堂堂	堂屋	堂堂	郎店	社店	館郎	郎店	平郎	店堂	平平	館助	衛門												

光融館出版禪學書類

天桂禪師提唱 (三版) 碧岩錄講義

▲和裝紙入全三冊定價貳圓七十錢▲洋裝全一冊定價貳圓半錢小包料各壹錢

山田孝道師校注 (三版) 禪門法語集

洋裝定價一圓五十錢小包料十五錢(三十種三十三冊合本凡八百頁)

森大狂居士校注 (再版) 續禪門法語集

洋裝定價二圓小包料十五錢(三十五種四十一冊合本凡千貳百頁)

山田孝道師著 (四版) 坐禪用心記 普勸坐禪儀 講義

全一冊 定價二十錢 郵稅四錢

若生國榮師著

(再版)

寒山詩講義

森大狂居士參訂

(三版)

和裝 定價四十錢
郵稅六錢

一休和尚全集

禪學編輯局參訂

(再版)

和裝 全一冊三百頁
定價四十錢郵稅六錢

白隱和尚全集

森大狂居士參訂

和裝 美本 三百頁
定價四十錢郵稅六錢

禪林叢書 第一篇

全

和裝、東坡禪喜集、澤庵和尚垂示、正眼國師眼目、定價三十五錢郵稅六錢

禪林叢書 第二篇

和裝、居士分燈錄、道元禪師和歌集、法燈國師法語、定價三十五錢 郵稅六錢

釋宗演師著

寶鏡三昧講義

大內青巒居士著

(品切)

碧岩錄十則講義

高田道見師著

一冊 定價五十錢
郵稅六錢

十玄談講義

江村秀山師著

偽仰要路講義

山田孝道師著

(三版)

證道歌講義

全一冊 定價十六錢
郵稅二錢

山田孝道師著

(再版)

信心銘講義

全一冊 定價十錢 郵稅二錢

東山領禪師著

達磨禪經說通考疏

美濃大判 全六冊(品切) 定價三圓 郵稅卅錢

若生國榮師著

(四版)

通俗活禪談

第一輯

全一冊 定價貳拾五錢 郵稅四錢

全

(三版)

通俗活禪談

第二輯

全一冊 定價貳拾五錢 郵稅四錢

禪學合本

第一卷十冊合本五十五錢第二、三、四卷十冊合本七十五錢第五卷十冊合本五十五錢郵稅各十錢

釋宗演師著

(三版)

靜坐のすゝめ

定價貳錢 郵稅四冊迄貳錢

織田号能師著

(再版)

大起信論義記講義

全一冊 定價七十五錢 郵稅八錢

島地默雷師著

(三版)

維摩經講義

全一冊 定價三十八錢 郵稅四錢

大内青巒居士著

(六版)

原人論講義

全一冊 定價三十五錢 郵稅四錢

全

(六版)

般若心經講義

全一冊 定價十五錢 郵稅四錢

釋宗演師著

(再版)

金剛經講義

山田孝道師著

(三版)

佛教すゝめ

全一冊

定價貳拾錢
郵稅四錢

曹洞在家日課要集

山田孝道師著

學道用心集講義

全一冊

定價三十錢
郵稅二錢

白隱禪師著

(再版)

ねほけの目ごまし

定價六錢
郵稅貳錢

新刊雜著

鷺尾順敬先生著

日佛家人名辭書

全一冊

定價九圓
郵稅五十錢

山田孝道師著

禪門鐵鎚 殺活自在

全一冊

定價貳拾五錢
郵稅四錢

齋藤唯信師著

佛教倫理の大觀

大和綴
全一冊

定價十二錢
郵稅四錢

安部正人編

鐵舟隨筆

全一冊
頗美裝

定價六十錢
郵稅十錢

若生國榮師著

禪學入門 短刀直入

全一冊

近刊

釋宗演師著

(再版)

金剛經講義

山田孝道師著

(三版)

佛教すゝめ

山田孝道師著

曹洞在家日課要集

學道用心集講義

白隱禪師著

(再版)

ねほけの目ごまし

新刊雜著

和一裝 定價貳拾錢
郵稅四錢

全一冊 定價三十錢
郵稅六錢

定價八錢
郵稅二錢

全一冊 定價三十錢
郵稅四錢

定價六錢
郵稅貳錢

鷺尾順敬先生著

日佛家人名辭書

山田孝道師著

殺活自在

禪門
鐵鎚

齋藤唯信師著

佛教倫理の大觀

安部正人編

鐵舟隨筆

若生國榮師著

禪學入門 短刀直入

全一冊 定價九圓
郵稅五十錢

全一冊 定價貳拾五錢
郵稅四錢

大和綴 全一冊 定價十二錢
郵稅四錢

全一冊 頗美裝 定價六十錢
郵稅十錢

全一冊 近刊

村上專精先生著

大乘佛說論批判

全一冊

定價五十錢
郵稅八錢

曹洞宗務局文書課編纂

修證義說教大全

(新版)

定價五十五錢
郵稅六錢

後藤北溟禪史著

修養禪語

(新版)

定價廿五錢
郵稅四錢

田中仙樵先生著

茶禪一味

全一冊

近刊

若生國榮師著

三寶鏡三昧講義

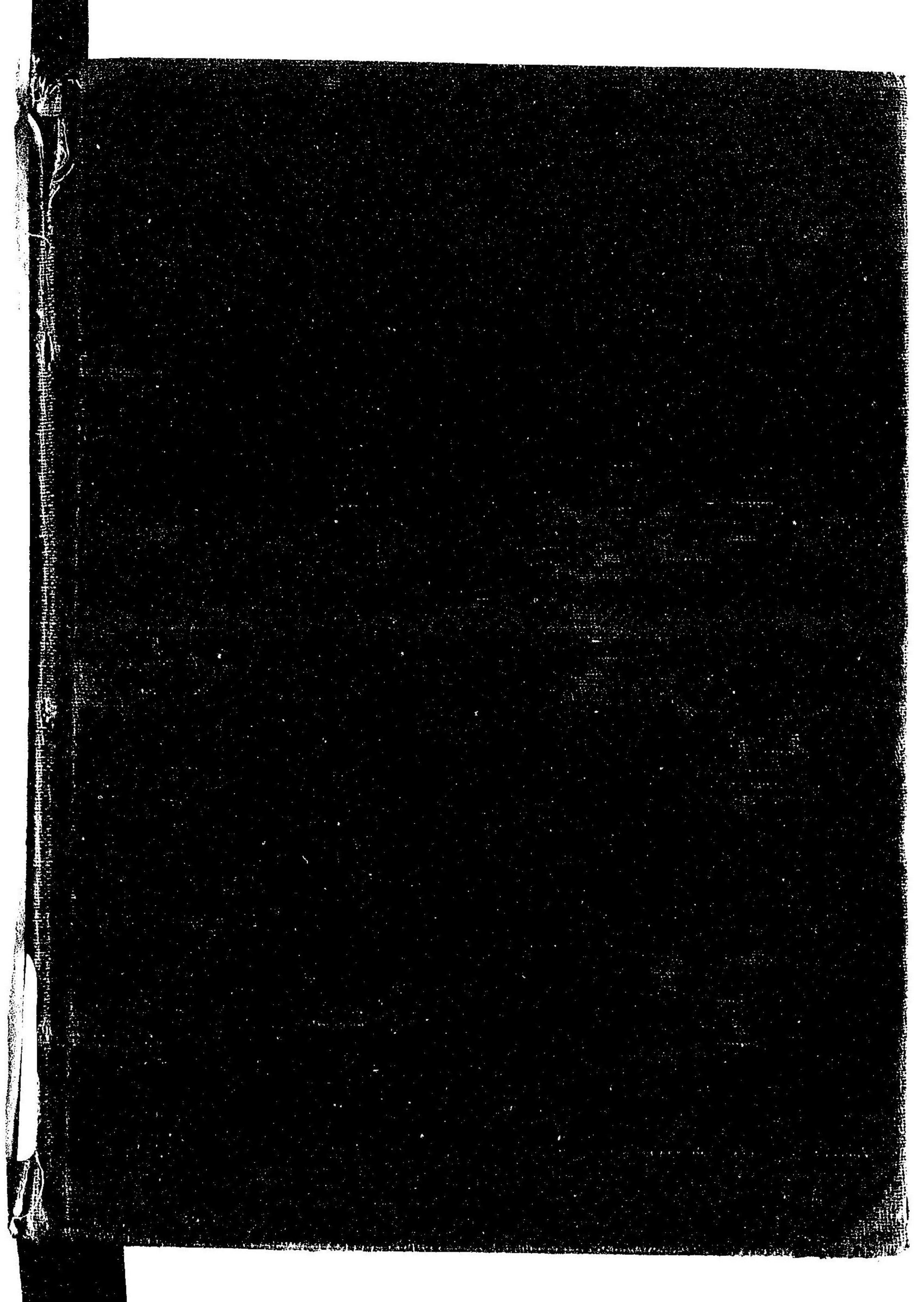
全一冊

近刊

94
215

94

215



13

010144-000-6

94-213

修養禪話

後藤 北溟 / 著

M37

AAE-1443

